

英 米 篇 I

福田光治・剣持武彦・小玉晃一 編

教育出版センター

比較文学シリーズ

欧米作家と日本近代文学 全五巻

編者紹介

ふく	だ	みつ	はる
福	田	光	治
けん	もち	たけ	ひこ
剣	持	武	彦
こ	だま	こう	いち
小	玉	晃	一

立教大学教授

二松学舎大学教授

青山学院大学教授

第一巻 英米篇Ⅰ

検印省略

発行所
株式会社

教育出版センター

東京都豊島区北大塚三一二九一二

電話 〇三(九一七)八九三〇(代)

振替口座東京一四六一二

郵便番号 一七〇

◇乱丁・落丁はおとりかえいたします

発行者	編集
柴崎芳夫	小剣福 玉持田 晃武光 一彦治

昭和四十九年十二月二十五日発行 ©

は し が き

比較文学研究は戦後の学問の国際化の気運のなかで大きく進展しつつある。日本の近代文学研究のために従来寄与してきた諸業績は、もっぱら日本の作家における欧米文学の影響という角度からなされてきた。そうした成果は最近において数々の研究書や講座として世に示されている。しかし、いまだ国別に外国の作家をまとめ、その作家の日本文学への影響を系統的に論述した一連の叢書や講座はその類を見ない。私どもはもはや日本の比較文学の研究がそうした叢書を作るべき段階に達していると判断した。また、比較文学への世上の期待はそうした叢書を求めていると感じるにいたった。たまたま教育出版センターでも比較文学の書物を出したいということで相談を受けたとき、私どもはそこで上記のような企画を提案したわけである。

私どもは比較文学の研究上、常々多くの学恩を受けつつある先輩・知友の協力を求め、そのもつとも得意とする作家を受けもっていただき、国別・作家別に、五巻のシリーズを編むことができた。とくに本シリーズでの特色は外国文学研究家と日本文学研究家の双方に担当していただいた点にある。比較文学の研究には自国及び外国文学の研究者相互の協力がぜひとも必要と思われる。一人にして両者を兼ねなければならないのが比較文学者であるが、おのずからその資質・能力には限度がある。おのれをわきまえ、他のすぐれた成果から謙虚にしかも批判的に学ぶことからこそ研究の

進展があろう。その意味でも本シリーズは最適の執筆者に登場していただけたと確信している。なお比較文学の方法はある方向を持ちながらも、読者がこのシリーズで実際に読みとられるように、そのアプローチのしかたには多様性がある。そしてそこに今後の課題もあると思う。

読者は本シリーズを国別・作家別にその最も興味のおもむくところから読みはじめることができる。そして欧米諸国の文学を代表するすぐれた個性が、日本の文学者にどのような受容され、変容し、日本文学に新しい要素を植えつけたか、あるいはまた拒否されたかをつぶさに見ることができよう。かくて読者も新たな問題意識のもとに作品に接することになるであらう。

比較文学は単に影響関係を云々することにのみ止まるものではなく、むしろ相互への理解と認識を深めることによって、日本文学・日本文化の特質を明らかにすることにこそその使命があらう。まさに比較文学は国際学であるとともに日本学であり、人文学の新しい可能性を示すものであるという自負のもとに、私どもはこのシリーズを世に送る。

読書子・研究家諸賢の忌憚のないご批判を期待したい。

昭和四十九年八月

編者

福田光治
劍持武彦
小玉晃一

目次

はし
が
き

概

説——英米作家の導入と日本思想の近代化——……吉 武 好 孝

- まえがき 1 幕末から明治初年まで——英作家を中心
 に—— 2 英米文学の流入とその役割——明十一—二十二
 年の間—— 3 シェイクスピア導入と思想の近代化 7
 W・スコットの翻訳 10 日本の近代化を助けた英米
 書 11 ミルトン、ワーズワスの導入 13 バイロン、
 シェリー、キーツの導入 22 ベーター、ロセッティ
 と日本文学 26 アメリカの作家たちと近代日本 29
 英米の作家から学んだ思想 43

シェークスピア……………河竹登志夫

序 説―近代史の縮図としての― 45 文明開化とハムレ

ット 48 文学的受容の系譜 55 演劇的受容の系譜 66

いわゆる近代以後 82

ワーズワスとコールリッジ……………岡 本 昌 夫

ワーズワスとコールリッジの交遊 86 宮崎潮処子と

ワーズワス 88 国木田独歩とワーズワス 96

島崎藤村とワーズワス 106 大和田建樹の場合 111

浦瀬白雨、小原無絃、西村酔夢など 114 昭和時代の

ワーズワス詩集と研究 121

バイロン……………衣 笠 梅 二 郎

バイロンの移入 128 バイロン詩の漢訳 132 「於母影」

のバイロン 138 バイロンと透谷 145 『欧米名家詩集』

とバイロン 152 バイロンと木村鷹太郎 157 バイロ

ンの母への手紙 163 バイロン没後百年記念 165

ホーソン……………佐藤孝己

概観 168 リーダーとともに 170 紹介・研究など 177

児童文学として 180 とり残されたホーソン 185

ロングフェロー……………剣持武彦

はじめに 194 ロングフェローのヨーロッパ体験 196

中村正直「打鉄匠歌」 198 ロングフェロー氏児童の

詩 199 宮崎八百吉訳「里鍛冶」 203 ロングフェロー

「村の鍛冶屋」と島崎藤村の劇詩「農夫」 210 小学

唱歌「村の鍛冶屋」 213 「エヴァンジェリン」と「孝

女白菊詩」 216 ロングフェローの翻訳「ダンテ『神

曲』と平田禿木、上田敏 222

ステイヴンソン……………田鍋幸信

はじめに 227 明治期における翻案 229 漱石とステ

イヴンソン 232 詩人ステイヴンソンと西条八十 238

中島敦とステイヴンソン 243

ユージン・オニール……………浅田寛厚

はじめに 251 オニール以前 252 オニールとの出会

い 255 築地小劇場とオニール 263 築地以後のオニ

ール 271

グレアム・グリーン……………中野記偉

戦前の紹介 277 翻訳について 280 影響を求めて 282

愛のために 284 犠牲となる女性 287 自由な転置 289

裏切りの雰囲気 291 無常観と終末論 294

イエス・ユダの原型― 297 沈黙は破られたのか 299

新しい結実 301

〈概観〉

英米作家の導入と日本思想の近代化

吉 武 好 孝

まえがき

1 概 観

日本は、「明治維新」という一大社会革命を欧米文化との接触と交流を通じて、いや応なしに通
過せざるをえなかった。それは、日本がもとめたというよりも、世界文化の発展の外部の事情によ
って、いわば強いられたようなものであった。そしてそれは、日本の歴史あつて以来はじめてとい
ってよいほどの大きな社会的変革の機会であつた。政治も社会の機構も経済の組織も思想や道徳も
文学や芸術も、宗教にいたるまでも、みんな維新に一新されるといったほどの一大革新の道を進む
ことになつてしまった。明治の初めの十年間は、政治や社会の動乱に費されて瞬く間に過ぎてしま
つた。だから、文学や芸術の方面の維新は、その性質上、その後につづく時代にならざるをえな

かった。そしてそれは、実質的には、明治十一年以後急げきに英米文学が翻訳されて読まれた時代からはじまる。しかし、私はそれ以前から明治の初年にいたるながい間に、英米の文学が翻訳や翻案を通じてどの程度まで日本人に知られていたかを概観して、先きへ進みたい。

幕末から明治初年まで——英作家を中心に——

日本人がはじめて西欧の文学を知ったのは、徳川家治いえはるの時代、すなわち安永三年（一七七四）頃のとて、十八世紀イギリスの諷刺小説家のＪ・スウィフトの『ガリバー旅行記』のストーリーを中心にした翻案物語『異国奇談和莊兵衛』（遊谷子著）が最も古いものである。著者は、長崎あたりで原作の筋を知ったものと推定されるが、この物語の中には奇妙奇てれつな人間の生活が描かれている。そのなかにはスウィフトの原作の話をとり入れたと思われる「大人国」や「小人国」の話が出て来て、おそらく大衆読物になっている。それにつづいては、『心謎解色糸』こころなぞとけたいろいと（五幕十場、四代南北作、文化七年）がある。これは、シェイクスピア原作、『ロメオとジュリエット』を翻案して芝居にしたもの、文化七年正月十五日を初日として、江戸の市村座で上演されて大当りをとったといわれる。『武蔵野女子大学紀要』七号、一九七二年三月、吉武好孝論文『翻案史研究の覚え書』および、『早稲田文学』大正五年四月号、沙翁記念号、井原青々園「日本に於ける沙翁劇」参照。

これにつづいては、十八世紀英国の小説家Ｄ・デフォアの『ロビンソン・クルーソー』（一七一九）をオランダ語訳から重訳した『漂流記事』（六冊）（黒田麴廬訳、嘉永初年頃）があるが、この翻訳は、小説としてではなく、実際に起った記録として訳され、六冊中の第一巻が、デフォアの『ロビンソン

・クルーソー』の訳である。しかし、この翻訳は明治になってから出版されたものだから、同じくオランダ語から翻訳された『魯敏遜漂行紀略』(横山由清訳、安政四年)の方が世に早く出て読まれたことになる。同じ小説の訳としては、明治になってからは、『魯敏遜全伝』(二冊)(斎藤了庵訳、明治五年、鉄線書屋)が前記の訳につづくが、この時代には文学書の翻訳がいかにもすくなかったことがわかる。

英米文学の流入とその役割——明十一と二十二年の間——

この時代になると、政治や社会の動揺もはば落ちついて、日本の読書界は江戸末期から残っていた戯作者たちの書く古い文学にも飽きていて、なにか清新な思想をもった真に文学らしい読物をもとめはじめていた。それを与えてくれるものは、その頃ようやく日本に入ってからかなり普及しはじめていた英米の小説や英語のテキスト類に選ばれていた文学の教材だった。当時の日本人はそれらを通じて英米の作家や作品の名前を知り、どんな文学が新しい時代の文学であるかを知ることができた。書物、とくに英書は英米と条約を結んだときから、機械類などとともに、重要な輸入品目のひとつになっていったから、英米の出版界で都合のよい書物が無差別に続々と輸入され、英語を日本人に教えこむのに必要な教科書もいく種類か持ちこまれていた。当時の学校の教師や牧師たちや翻訳家たちは、しきりにそれをうまく利用して英米の文学の知識を日本人の間にひろめてくれた。だから、そのような人々は、偶然手に入った英米文学の作品にとびつき、テキストなどで知った英米作家の作品を手当り次第に読んで、おぼつかない英語の力をもってそれを翻訳した。このような雰囲

気のなかで、もつとも早くから日本に普及した英米の作家は、シェイクスピア、W・スコット、リットン、ディズレイリ、ワーズワス、バイロン、米作家では、ベンジャミン・フランクリン、エマソン、ロングフェロウ、アラン・ポーらである。

シェイクスピアがはじめて本格的に和田垣謙三によって漢文訳されたのは明治十二年のことであるが、その輸入紹介の歴史は後まわしにして、先ず純粹な意味での文学的作品の第一の翻訳は、『歐洲花柳春話』五、(リットン(一八〇三—七三)原作『アーネスト・マルトラウァース』とその続篇『アリス』の抄訳、明11、丹羽純一郎訳)である。これは嚴密な意味の全訳ではなく、読者本位に原作の大意をとつて、漢字的表現を多くして片仮名まじりの固くるしい日本語で訳し流した抄訳である。これも一種の「豪傑訳」にすぎない。しかし、これがきっかけになって、当時の日本の政治熱にあふり立てられて、俗に、「リットンもの」とよばれる政治小説の一大ブームが現出するのである。前記リットンの原作は、純粹な意味の政治小説ではなく、ふつうの文学的内容をもつ純文学なのに、これ以後二十年代まで、つぎに説くディズレイリの作品などとともに、その翻訳名の頭に政治小説……といったような、いわゆる角書つのがきをつけて、「売らんかな」の意図をあらわに出すのが大流行になって、十数年も二十年も続くのである。それらの翻訳書はほとんど全部が原作の題名をとらず、勝手な角書つのがきをつけた自由奔放な題名に変えているので、何という小説の翻訳だか見当がつかないものばかりである。つぎに掲げる「リットンもの」のリストをみれば、ほほえましくなるであらう。

『歐洲花柳春話』(丹羽純一郎訳、明11)

奇事

『歐洲寄想春史』(『ボンベイ最後の日』丹羽純一郎訳、明12)

奇話

『開卷驚奇龍動奇談』(『ストレンヂ・ストーリー』井上勳訳、明13)

驚奇

『瀛世繁思談』（『ケネルム・チリングリ』尾崎庸夫訳、明18）
 嘲俗

『サクソン王の名義』（『ハロルド物語』（『ハロルド』磯野徳三郎訳、明20）

『文学連理談』（『ユージン・アラム』服部誠一訳、明20）

『悲憤慨世士伝』（『リエンジ』坪内逍遙訳、明20）

『榮枯譚』（『カルデロン』稲庵居士訳、明21）

『奸雄之末路』（『カルデロン』稲庵吉田熹六訳、明21）

『奔彪榮華の夢』（『ボンベイ最後の日』青竺小史訳、明21）

『夜と朝』（『夜と朝』益田克徳訳、明22）

わずかに十一、二年間に一人の作家の作品が十一作も翻訳されるようなことは珍しいといわねばならない。

リットンの小説の翻訳のなかでも『夜と朝』は、英米文学の翻訳としてはわが国最初の口語訳として特筆すべき画期的な翻訳である。それから、前表中の『ユージン・アラム』については、明治の女流作家中島湘烟しやうえんがこの長編小説をモデルにして、明治二十年十月（一八八七）に『善惡の岐』という題をつけた翻案小説を、『女学雑誌』に発表している。この二つのことをここで特に注意しておきたい。なおこの『ユージン・アラム』は、明治三十年六月になると、原余三郎（抱一庵）が、げんみつな翻訳ではなく、かといつて翻案ともいえない『聖人欺盜賊欺』（上下、今古堂）という表題をつけた抄訳を出している。これは「リットンもの」の人氣をうまく利用して読者に売ろうと企てたものであったが、訳者の目的は十分に達せられて大きな売行きを示したものであった。

つぎに注意すべきは、当時の英米文学ブームのひとつとして、B・ディズレイリ（一八〇四—八二）の小説がしきりに訳されて、「ディズレイリもの」の流行をつくったことである。ディズレイリは、リットンと同様にイギリスの有名な政治家でありながら小説をたくさん書いた人で、ビーコンスフィールド伯爵ともいわれる人である。彼は、ブルジョアが貴族と妥協して政治に当ることを主題にしたものを多く書き、「青年イギリス」という保守党の更生運動の思想的支柱となった。時あたかも、日本には、彼の小説の翻訳が刺激になって、尾崎聖堂の「新日本運動」が現われたのをもてもわかるように、彼の小説に流れている改良主義的な自由主義的思想は当時の日本に必要なものである。それがこのブームをつくる最も大きな要因であった。

「ディズレイリもの」のおもなものは、『政党しやうとう春鶯囀しやうおうぜん』（関直彦訳、明17、『コニングスビー』の訳）『三英政界之情波』（渡辺治訳、明19、『エンディミオン』の訳）、『雙鶯そうおう春話しゅんわ』（牛山鶴堂訳、明20、『ヘンリー・タ・テンブル』の訳）、『政海せいかい大胆書生』（井上勤訳、明20、『ウィヴィアン・グレイ』の訳）『昆太利物語こんたりに』（福地源一郎訳、明20、『コンタリニ・フレミング』の訳）の五つである。

リットンとディズレイリの作品の訳の果たした役割は、第一には、この時代における日本の政治熱に刺激されて現われ、それが更にその政治熱をあふり立て「新日本運動」を起させる結果になったこと、第二には、日本人の政治小説家たち、たとえば、矢野文雄（龍溪）、末広鉄腸、須藤南翠、柴四郎（東海散史）らのような作家を産み出す因をつくったこと、第三には、これら前記の訳書はほとんどみな、いわゆる「豪傑訳」とよばれる乱暴な訳であって、日本の古い漢文調の文章の書きかた（文体）を、その根幹から破壊して揺がせ、それがひいては言文一致による日本文体の統一運動にまで発展せざるをえないという、大きな改革の遠い原因をつくったこと——この三つの役割を果たし

たことを忘れてはならない。

シェイクスピア導入と思想の近代化

前にもちょっと触れたように、シェイクスピア（二五六四—一六一六）の翻訳は、明治になってからは、十二年に出た『李王』（和田垣謙三の漢文訳）にはじまっている。そして、彼の作品を直接翻訳したものと、チャールズ・ラムの『シェイクスピア物語』を訳したり、或は筋書きを中心に訳述したものやを合せると、明治十二年から同二十三年までの間に三十二種類ほどの翻訳書や翻案が出版されている。この事實は、シェイクスピアの作品にふくまれている思想がいかに当時の日本の近代化にとって必要だったかを雄弁に物語っている。シェイクスピアのおもしろさは、全く彼のもつ近代性にあるのであって、彼が新興の市民階級の生活や心理を描くばあいはいうまでもなく、貴族や王侯の生活や心理を描いている史劇のばあいでも、新しい時代の思想的な雰囲気の中に王侯や貴族たちがどのような反応を示しているかを、彼一流の人間観察の眼を通して細かにしかも正確に描きわけるといふ批判の眼で描いている点である。そのような新時代の批判精神は、明治のこの時代の日本にとって最も必要な思想的立場だった。だからこそ、シェイクスピアの作品がこのように多く翻訳されて読まれたのである。芝居の筋のおもしろさやユーモアはいうまでもなく彼の大きな魅力のひとつにはちがいないが、人間の心理や性格を細かくとらえて描く彼のリアリスティックな人間描写の腕の冴えは拔群なものがある。その翻訳紹介が日本の文学界を啓蒙してくれた功績は、その意味では、英米の、いや、世界のどの国の作家の紹介よりも大きかったといつてよい。

くわしいことは、本書中の河竹登志夫氏の論文を読んでいただければ明かになるだろう。なお、シェイクスピアの劇が種本になっていわゆる「翻案劇」となったり、彼の物語詩「ルクリスを強姦する」が美妙の翻案小説になったというように、シェイクスピア劇、或はラムの物語をもとにした翻案作品などを数えると、ここでは扱えないほどたくさんあるが、それらについては、私の近刊予定の書、『近代文学の中の西欧―近代日本翻案史―』にくわしく扱っているので、出版後にご参照願いたい。で、私はここでは、この時代にシェイクスピアのどんな作品が、或は原作から直接に或はラムの物語によって翻訳紹介されているかを、年代順に、ごく大ざっぱにとらえてみよう。

- ①『『李王』』（和田垣謙三の漢訳、『リア王』明12）
- ②『『仏国某州麻吉侯情話』』（翠嵐先生訳、『お気に召すまま』明16）
- ③『『歐洲ジュリアス・シーザルの劇』』（河島敬蔵訳、『ジュリアス・シーザー』本邦初完訳、明16）
- ④『『人肉質入裁判』』（井上勳訳、『ヴェニスの商人』ラムから、明16）
- ⑤『『戯曲自由太刀餘波鋭鋒』』（坪内逍遙訳、『ジュリアス・シーザー』明17）
奇談 戯曲 自由太刀 餘波鋭鋒
- ⑥『『何枚錢の世の中』』（さくらとぎせにのよのなか、小宮山天香立案、宇田川文海訳、『ヴェニスの商人』明18）
何枚錢の世の中
- ⑦『『人肉質入裁判法廷之場』』（月の舎しのぶ訳、『ヴェニスの商人』明18）
- ⑧『『皇子斑列多物語』』（坪内逍遙訳、『ハムレット』明18）
皇子斑列多物語
- ⑨『『露樹春情浮世之夢』』（河島敬蔵訳、『ロメオとジュリエット』明19）
露樹春情浮世之夢
- ⑩『『沙土比羅馬盛衰鑒』』（河島敬蔵訳、『ジュリアス・シーザー』明19）
沙土比羅馬盛衰鑒
- ⑪『『葉武烈士倭錦絵』』（仮名垣魯文翻案、明19）
葉武烈士倭錦絵
- ⑫『『泰西奇談』』（品田太吉訳、『冬物語』『因果物語』ラムから、明19）